

---

# 真実の価値/沖田・土方

音紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真実の価値／沖田・土方

### 【Nコード】

N3999D

### 【作者名】

音紅

### 【あらすじ】

沖田は土方のことを今でも恨んでいる…？

## 1 タイトルはシリアスだけど内容はそんなでもない。(前書き)

銀魂を元にしたお話になっています。

沖田×土方ではありませんのでご了承ください。

あくまで筆者の夢物語です。

※横書きで読んで下さい。ご迷惑をお掛けします。

## 1 タイトルはシリアスだけど内容はそんなでもない。

空を見上げた。

陽が沈もうとしている。

こんな時、思い出すのは…そう、あのことだ。

気に食わねエ野郎と姉上。

二人は両想いだった。

けど、姉上の想いをいとも簡単に断ち切って江戸に出てきた野郎。最初は どうしてそんなことをしたのか、解らなかった。

——いや。解っていたけど、認めたくなかった。

野郎を許さないことが、姉上に出来る唯一の孝行だと思っていたからだ。

「土方さんは何処でイ」

いつも通りに起きてきた俺は、真っ先に野郎の居場所を確かめる。

「え…。さあ？何処行つたんでしよう」

山崎はきよんとしている。

いつもなら当然のようにこの部屋か、庭で剣の手入れをしてる筈だ。

「チッ…何処ほつき歩いてんだあの野郎…」

「そういえば局長もいませんよね。二人でお出かけかな」

「山崎イ…お前はいつ死ぬかも解らねエ真選組にいて、よくもそんな平和なこと言つてられんなア」

「いつ死ぬかっていうか、今死にそうですよ隊長オツ」

「お。悪イ。気づいたら刀抜いてたんでさア」

「嘘でしょそれっ」

——ピーピー騒ぐ山崎を置いて、屯所を一通り探して回ることにした。



「……」

…いねエ。

マジで何処行っただ、あの野郎。

他に行きそうな場所を考えていると、別の用事を思い出した。

——姉上の……。

## 1 タイトルはシリアスだけど内容はそんなでもない。(後書き)

此処まで読んで下さって有難う御座います。

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

又、更新が遅くなるかも知れませんがご了承下さい。

## 2 冷たい風に当たると切なくなる。(前書き)

あらすじ

沖田は土方の行方を捜すが、思い出したのは姉・ミツバの墓参りだった。

## 2 冷たい風に当たると切なくなる。

「…行くか」

そう短く呟いた。

今行かなくても良いのだろうが、今行かなければいけない気がしたのだ。

「あれ、沖田隊長もお出かけで——仕事ですか？」

わざわざ『お出かけ』を『仕事』を言い直した山崎を見て、

「…おー」

「刀も持たずに…また万事屋の旦那の所ですか？あそこん所の女の子と仲良いで——」

言葉を遮るようにバズーカを向ける。

「すすすすすいませんでした、てゆーかどっから取りだしたのそれっ」

「…行ってくるぜエ」

「あ、はい」

ちなみに、バズーカは置いていく。

流石にあんな物騒なモン、持って行けない。



その頃、土方と近藤は静かな墓地にいた。

「…なアトシ、総悟に言ってこなくて、良かったのか？」

土方は珍しく煙草を吸っていない。手を伸ばもしない。

ただ小さく息を吐き、返答する。

「彼奴アイツに言ったら殺されるよ。ただでさえ、俺ア彼奴に嫌われてんだ」

「そうか？」



「…ああ」

「でもな、総悟の親類の墓参りだぞ？別に悪いことをしてるわけじゃないし、彼奴だって殺しはせんだろう」

「…俺にはそこまで自信はねェ。殺されて当然のこと、やってきてるんだからな」

近藤が此処まできて、ふ、と笑う。

「らしくねェな、トシ。そんなことお前が言うなんて」

土方がしゃがみ込んだ。  
顔を隠す。

「だってそーだろ。彼奴振って、しかも旦那斬り捨てるなんざ」

「旦那斬ったのは総悟だって同じだろう。それに、総悟は自分から行ったんだぞ？」

「だが、姉貴の幸せを最後まで奪ったのは俺だ」

「トシ……」

冷たい風が吹き抜けた。

## 2 冷たい風に当たると切なくなる。(後書き)

此処まで読んで下さり、有難う御座います^^  
もう少し続くと思われますので宜しく願います。

誤字脱字がありましたら教えて下さい。

又、更新が遅くなるかも知れませんがご了承下さい。

### 3 結局言いたいこと言って帰って行く背中を見るのは悪いモンじゃない。(前)

あらすじ

一方土方は、近藤と共にミツバの墓参りに来ていた…。

### 3 結局言いたいこと言って帰って行く背中を見るのは悪いモンじゃない。

「!」

「!」

目を見開いた。

まさか、此処で野郎と会うなんて、思ってもみななかったからだ。

「総悟…」

近藤さんが俺の名前を呟く。

野郎は俺と同じように目を見開き、また顔を隠した。

姉上の墓に近づく。

土方<sup>アイツ</sup>の隣にしゃがんだ。

「——まさか、こんな所で土方さんに会えるなんて思ってやせんでした」

「…」

「総悟、トシは——」

「…まだ勘違いしてるかも知れねえから、言っておきますけどね」  
土方は黙ったままだった。

「姉上から幸せを奪ったのは…土方さんじゃありません」

「!」

ピクッと体が揺れた。

「俺でさァ」

「…総悟」

近藤さんの声じゃなかった。

「…何でィ？」

「…姉貴は…怒ってるか」

俺は思わず少し笑った。

「笑うなよ」

「こいつアすいません」

風が吹いた。

さっき吹いたのとは違う、冷たいけれど、柔らかい風。

「――：さア、どーなんでしょう」

花を添え、立ち上がった。

「近藤さんも土方さんも、いい加減帰らねエと公務執行妨害で逮捕ですぜイ」

やっと近藤さんが口を開いた。

「公務執行妨害って：お前はサボってばっかだろーが」

「あれ、こんな時くらい、警察っぽいこと言わして下せエよ」

「いつも言え。いつも」

笑いが零れる。

「じゃ、お先に帰らして頂きますア。大事な仕事が残ってるんで」

「：もう、立ち直ったみたいだぞ、トシ」

近藤は沖田の背を見送りながら、返事をせずに煙草をくわえた土方に言った。

### 3 結局言いたいこと言って帰って行く背中を見るのは悪いモンじゃない。

(後

此処まで読んで下さった方、有難う御座います^^  
実はあと一話だけ続きます。

誤字脱字がありましたら教えて下さい。

更新が遅くなることがありますのでご了承下さい。

#### 4 真実の価値って認めた奴だけが解るモンでしょう。(前書き)

あらすじ

ミツバの墓の前で偶然会った沖田と土方。

蟠りは無くなったハズなのだが…。

#### 4 真実の価値って認めた奴だけが解るモンでしょう。



「おい山崎。総悟見てねェか？」

土方は煎餅をかじっている山崎を見つけ、声を掛けた。

「え、今度は副長ですか？」

「今度はってなんだよ」

「いや、この前は隊長が副長の居場所を訊いてきたんで」

「ふうん…？何でだ」

「そこまでは聞いていませんよ。いくら密偵でもプライベートまで入っていきませんもん、俺」

「…まあ良い。で、総悟は何処だ？」

「知りません」

「っ…テメェ、後で覚えてろよ」

「え！？何でですかっ!？」

土方は山崎の訴えを軽く無視し、沖田を捜す。

廊下を歩いていると、はた、と思い出した。

「総悟の部屋…見てねェよな」

自分のアホさに嫌気が差してくる。

一応、部屋に入るときのノックのような、確かめのような動作。

「おい、総悟。入るぞ」

「…」

返事は返ってこない。

面倒なので、土方は部屋に足を踏み入れた。

「総悟？」

殺風景な部屋には、誰もいないように思えた。



けれど、それは部屋のど真ん中で行われていた。

「…」

相当集中しているらしい。

「何してる」

土方が彼の手元を覗き込んだ。

「うわっ！…何だ土方さんじゃありやせんか。何の用ですかイ？」

「…テメエはその手に持っている物を隠してから喋れ」

沖田は自分の手を見る。

——『土方』と書かれた藁人形わらにんぎょうが握られている。

「テメエは人が折角——！！」

殴りかかろうとする腕を受け止め、沖田はきよとした。

「折角…何ですかイ？」

「！！！！」

土方は身を翻して部屋を出て行った。

——沖田はちゃんと解っていた。

土方の顔が真っ赤で、しかも小さな声で

「ありがとよ」

と言っ行って行ったことも。

終

#### 4 真実の価値って認めた奴だけが解るモンでしょう。(後書き)

此処までお付き合い頂き、本当に有難う御座いました!!  
後書きはまた次のページに書きたいと思います。

誤字脱字がありましたら教えて下さい。

## 5 後書きって言っても大したこと書けないですすいません。(前書き)

後書きです。

## 5 後書きって言っても大したこと書けないですすいません。

此処まで読んで下さっている方、本当に有難う御座います。

この話を書く前に、アニメのミツバ編を見ました。

その時の切なさは今でも鮮明に思い出せます。

でも所詮視聴者ですから、キャラクターの気持ちまでは解らないんですよね（笑）

当たり前って言われたらお終いなんですけど。

もし私が『彼』だったら、どんなに辛い決断だったでしょう。

今まで自分を大切に想っていてくれた人。

また自分も、その人を大切に想っていた。

それはとても幸せなことなのだけれど、やっぱりどうしても、上手くはいかない。

解り合えないのだろうか——いいえ、そうではないはず。

諦めることが出来るなら、相手を認める勇氣に変えて、ただ真っ直ぐ、瞳を見つめて。

【絆】なんて綺麗なモノじゃなくても。

【友情】なんて感じられるモノじゃなくても。

そこに信じられる気持ちがあるなら、大丈夫。

泥臭くても頑なな、感じられないけれど真っ直ぐな。

そんな気持ちを貴方に——伝えたいと思うなら。

いつか解り合える日が来るでしょう。

どんなに唾み合ったって、きっと…そんな時を待ちたいと思います。皆さんも一緒にどうですか？待つのだって、嫌なことじゃないですよ。

…と言いながら最終話では沖田くんが呪おうとしてますが（笑）  
真実の価値はどの位なのか…私にもいつか解ったら良いな。

音紅

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3999d/>

---

真実の価値/沖田・土方

2010年10月10日20時06分発行